

第百三十四話 国民党軍の無道な作戦と日本軍の人道対応

支那では古来より、焦土作戦や河川決壊作戦が常套手段であり、それが、支那事変でも敢行されて、日本軍に打撃を与え、それ以上の悲劇を国民に齎した。堅壁清野(けんぺきせいや)と呼ばれる城壁に囲まれた市街地内に人員を集中し、城外は焦土化する作戦を南京で大々的に行い、黄河決壊事件と呼ばれる黄河氾濫作戦がそれである。その概要を見よう。

1 黄河決壊事件(1938(S15)年6月)

(1) 黄河決壊事件に至る迄の経緯等

盧溝橋事件に端を発した支那事変は、北支から次第に、第二次上海事変(1937/8/13～10/26)、南京戦(1937/12/1～)、徐州攻略(1938/4/17～)と支那全土に拡大していった。大本営は、徐州作戦の制限ラインを蘭封までと定めていたが、1938(S15)年6月2日、北支那方面軍は、そのラインを越えての追撃を命じた。

日本軍が京漢線に至り、そして漢口に脅威が迫ることを恐れた国民党軍は、蒋介石の承認を得て、「黄河氾濫」により日本軍の進撃を止めるべく、開封北方の堤防上に、内径10m、深さ15mの穴多数を掘削し、横坑で接続してあった。5月下旬頃から準備が開始されている。

(2) 堤防破壊とその影響

蒋介石は、日本軍の背後を突く形での堤防破壊を命じたが、担当将軍は国民党軍の撤退終了まで延期していた。6月7日失敗、6月9日場所変更して破壊実施、続いて6月11日、12日にも行った。水没範囲は、11都市と4000村に及び、3省の農地が農作物ごと破壊、水死者100万人、被害者は6000万人とも云われる。史上空前の人災・環境破壊である。



(3) 日本軍の対応

12日1700には堤防修理に出動、筏舟百数十艘を出して住民と共に救助活動を行い、且つ住民避難誘導用の堤防と河道を築いた。日本軍には殆ど被害はなかった。国民党軍は、現場に近づく日本軍に攻撃を加えた他、住民と共に実施中の水防作業をも妨害した。日本軍により救助された避難民は、開封方面1万、朱仙鎮、通許方面5万、慰氏方面2万、その他数万であった。何たる無道だ。軍事上の必要性(?)と信じれば、自国民すら見殺しにする異常さに驚くほかない。

(4) 報道等

中国側は、日本軍が行ったとの偽情報を発信した。各国メディアは慎重姿勢を示したという。当然だろう。それにしても彼等の厚かましさに恐れ入る。

2 堅壁清野

国民党軍は、本作戦を、支那事変期を通じ、日本軍・中国共産党軍双方に対して行った。焦土化の対象は、軍事施設や食糧倉庫のみならず田畑や民家まで及んだ。南京戦では、日本軍の遮蔽物に使われる可能性のある建物すべてを焼却したとされる。

蒋介石は、中国軍の83個師団を江北に撤退させる退却掩護作戦の一環として、南京の固守を命じ、日本軍進撃を食い止めるために橋梁、道路を徹底的に破壊し、家屋を焼き、食料を持ち去った。南京城外15マイルの空野清野作戦であった。

流言に惑わされた国民党軍による放火(焦土作戦)で起きた長沙大火(1938(S15)年11月13日)もある。

- * 日本軍は時に濡れ衣を着せられ、反論も真面に耳を傾けて貰えず、悪評のみが拡大していった。黄河決壊事件時における日本軍の対応など、まだまだ知られるべき事柄がある筈だ。それらに目を向けるべき秋が来たのではないか?